



平成31年 № 67
初春 **ねんが**号

あきばさん

発行人／発行所
秋葉山 新井寺
272-0144
千葉県市川市新井
1丁目9の1
電話047-357-8319
FAX047-357-8399
mail: info@shinseiji.jp
http://www.shinseiji.jp
郵便振替00150-2-282968

年頭のごあいさつ

当山住持

謹賀新年。年頭にあたり、当寺檀

信徒各家、当寺秋葉講中、月例坐禅会・写経会・梅花講の皆様、および有縁無縁の信心の願主 皆様の**福寿多幸**を心よりご祈念申し上げます。

昨年は、当山の恒例行持のほか、青森県の恐山菩提寺様、曹洞宗第三の本山ともいわれた岩手県の正法寺様に、檀信徒の皆様と、有意義に親しく参拝旅行をさせていただきました。参加された皆様には、それぞれに人生勉強を重ねられたことと同慶至極に存じます。

お寺では、本年も檀信徒の皆様、ご縁の皆様と、ご先祖様のご供養とあわせて、心豊かな平和な年でありますよう、布教教化の行持を企画し、同心同行、ご一緒にご精進申し上げます。

さて、昨年は、世相を表わす漢字が「災」とされたように、世の中では自然災害をはじめ、天災・人災・交通事故などの大きな災害に見舞われた一年でした。さらに、心の問題、少子高齢化に伴う認知症や介護問題などが現実化した一年でもありました。

本年は、こうした諸問題に加え、二〇二〇年に日本で開催される世界スポーツの祭典「東京オリンピック」に向けても、よきに悪しきに、さらに様々な問題が生じることでしょう。私共は、お互いに持ちつ持たれつ助け合って、できる限りの力を結集し、世のため、人のため、家族・自分自身のために協力し、よき年を願って努力精進したいものです。

本年も、どうぞ、よろしく御願い申し上げます。
合掌

新寺「瓏仙院(ろうせんいん)」の建立

平成二十二年十一月に、曹洞宗より認可を受け、松戸市に建立しました、新寺「瓏仙院」が仏教界の新聞『仏教タイムス』に特集、紹介されました。

この瓏仙院は、新井寺の分院として、檀信徒や地域社会、そして、世の中の皆様の信仰生活に、人生に少しでも役立つことを願って建立いたしました。どうぞ、どなた様もご活用ください。

今年もよろしく

お願いします



心の鏡

戌山本崇文

(野田市 浄禅寺住職・戌とし)

新年を迎え、皆様の御多幸を御祈願申し上げます。

時の流れは変わらぬものの、何故か毎年「光陰矢の如し」の加速を感じます。関宿の地（現在は野田市）にご縁を頂き十五年。関東平野の真ん中。

とつても空が広い！
何故だろうか？

ある日、お檀家さんとの談笑中、子どもの頃は、よく自然と共に山で遊び、学び楽しかったという話をしました。

そこで、あることに気づきました。「山」の定義です。この関宿の地は平野なので、標高ではなく、木が沢山あるところ、すなわち、林が山なのです。日本一標高の高い富士山を見て生まれ育った私は、それは山ではないのでは？と思いましたが、どちらも紛れもなく山なのだ気づきました。

子どもの頃、よく山で遊んだ思い出。アケビにカラスウリ、蟬やカブト虫。夕方になると、ヒグラシの声の響きに、「そろそろ帰りなさい」と、何か奥深い山の会話を感じたことを思い出します。当時は、ありのままの山の声を感じ、何ものにもとらわれずに山と会話をしていたのではないかと。

道元禅師様が

峰の色 溪の響きも みなながら

我が釈迦牟尼の声と姿と

という和歌を詠まれています。少年時代の私を感じていた山の声は、まさに仏様の御声であったのでしよう。

自然を感じ、自然に相對することに感謝す。すなわち、仏様の御姿を感じ、仏様に相對することに感謝す。

仏様の御声や御姿を感じる心の鏡を曇らすことのなきよう、日々、感謝の気持ちをもつて精進してまいります。

本年も、よろしくお願いいたします。

合掌

「最初」で「最後」の心意気

寅松井純照

(松戸市 瓏仙院守塔・寅とし)

平成三十一年、平成最後のお正月を迎えました。

毎年めぐってくるお正月ですが、「最後」という言葉がつくと、不思議に特別な気がします。もうこれで終わってしまうのかと思うと、とても感慨深く感じます。

ここ数年、お塔婆を書かせていただくようになりました。お塔婆は、「書き直し」が出来ません。そして、毛筆には筆の流れがあります。書き始めたら、戻ることにも止まることも、ごまかすこともなく書き終えなくてはなりません。供養のお塔婆ですから、丁寧に一文字ずつ筆を進める。それはもちろんですが、

やり直しがきかないと思うと、真剣に正面から書き進めていかななくてはなりません。一本ずつ一文字ずつが、最初で最後のお塔婆です。

「最後」という言葉の響きはなんとなく、淋しい気がします。けれども、最後だからこそ、がんばれる。最後だからこそ、食らいついていく。そんな風に、人の気持ちを奮い立たせる力もある言葉だと思います。

平成最後の四ヶ月が始まりました。平成のラストスパート、そして新しい元号へのファーストステップ。記念すべき年となるよう、精進してまいりたいと思います。

亥年にちなみ、「猪突猛進」、何ごとにも最後のチャンスと思ひ、一心不乱に突き進みます。いつものように周囲を省みず直進している時には、どうかご遠慮なく、ご鞭撻下さいませ。今年もよろしく願ひします。



合掌

お仲間と過ごす時間を

大切に



松井百合子

(当山 寺族・丑どし)

あけましておめでとうございます。私ごとですが、おかげさまで、この三月に古稀を迎える歳になりました。年齢を重ねるにつれ、もう無理かな……と思うことも多くなってまいりましたが、その中でも、人との出会いやお仲間と一緒に過ごす時間が大切と感じるようになってきました。

ある心臓外科の先生が、健康で認知症にならないための秘訣として、人と話すこと・本を読み、新しい知識を得ること・散歩をして筋肉を保つこととお話していました。

お仲間をお誘いして催しものなどに足を運び、毎日を元気に過ごしたいものです。私は、「全日本仏教婦人連盟」という会のお仲間に入れていただき、お寺めぐり・法話の会・三仏忌などの行事に参加させていただいております。この会が、新たな出会いや学びの機会となっております。

新井寺では、月例行事として、御詠歌の会・写経会・坐禅会を、また、札所めぐりや参拝旅行、お花のアレンジメントや手芸

の会なども行なっています。お散歩やおしゃべりかたがた、お寺にお出かけになりませんか。新たな出会いが、きっと、人生にたのしみと彩りを添えてくれます。

また、十月には、曹洞宗婦人会関東管区研修会が、千葉市幕張で開催されます。ぜひ、ご一緒に参加いたしましょう。本年もよろしく願ひいたします。

合掌

花屋秋葉山「十周年」

松井礼子

(花屋秋葉山店主・卯どし)

花屋秋葉山は今年、十周年を迎えます。たくさんのお花々との出会いは、私の日常の源になっています。

花屋生活で気づいたことは、日本文化と花は結び付いているということでした。正月は松、ひな祭りは桃の花、こどもの日には菖蒲、お盆にはホオズキ、十五夜にはすすきを飾るように、日本文化の中心には、いつも「花」があります。

私は、大学では日本文化を専攻し、古い書物や絵画から当時の人々の生活を読み解いていましたが、いま花屋として日本文化を捉えると、なかなか面白いものだと感じています。

残念ながら、現在の日本には日常的に花を飾るといふ文化はありません。しかし、お仏壇には常に花が供えられています。これは、ご先祖様を大切にするという日本人の国民性に由来するものであると考えられます。

幼い頃から生き物が大好きであったこと・大学で日本文化を専攻したことは、いま花に携わる仕事をしていることにつながっています。生き物に触れることで養われた優しい気持ち、日本文化を考察することで学んだ日本人としての心をさらに温めて、これからも、日本文化を飾る花を束ねていきたいと思えます。

花屋秋葉山は、お客様のご要望に合わせ、新鮮で良いお花をご用意するため、**完全予約制**としています。お花が必要なときには、お気軽にご連絡ください。

どうぞ、よろしくお願ひします。



さらに参ぜよ三十年



松井量孝

(当山 副住職・編集小子・未どし)

「腰にシワを寄せずに着物が着られるようになるには、三十年かかる」。二十五年前の得度式(とくどしき)の日、帯を締めた白衣姿のわたしに、先代方丈様がかけてくださった言葉です。三十年経ったら上手に着物が着られるようになる、ということではありません。この言葉の深さに気づいたのは、つい最近のことでした。

昨年、さまざまな人に出会い、多くの学びの機会をいただきました。どこに行っても、何を行っても、自分の未熟さを痛感しては、慚愧に堪えないおもいでいっぱいでした。皆様の親切心には、感謝の気持ちがあふれました。その自分に浮かんでは、修行道場でしばしば耳にした「さらに参ぜよ三十年」という言葉でした。修行道場でこの言葉を聞いていたわたしは、言葉面だけをいただいていたにすぎなかったことに気づきました。

さらに参ぜよ三十年

太山に登らざれば 天の高きを知らず
滄溟を渉らざれば 海の高きを知らず

道元禪師

「更に参ぜよ三十年」とは、限りなく修行を続けなさいという道元禪師様の叱咤激励といえましょう。山を登ってみなければ、天の高さもわからない。大海原を渉ってみなければ、海の高さ(ひろさ)を知ることもできない。すなわち、自分のからだど心で行じてはじめて、その高さや闊さ(ひろさ)がわかるということ。わたし自身をふり返れば、さまざまな経験を通じ、自分の未熟さを再認識すること、この道のはるかなること、深きことを学んだということなのだと思います。だからこそ、「更に参ぜよ三十年」が自分の中により響いてくるのです。

いま、改めて先代方丈様の言葉を考え、改めて「三十年はがんばりなさい」ではなく、ひとたび志したならば、限りなく、たゆまずに修行を続けなさいという、新たな門出の励みだったのでしよう。さまざまな場で足りない自分に気づくことができたおかげで、「さらに参ぜよ三十年」、そして、先代方丈様の言葉の深さにも気づくことができました。

限りなく参じて、窮まりなき道の半歩一步を深め、つねに、謙虚に学べる自己でありたいと念じています。

本年もどうぞよろしくお願ひします。みなさまのご清安をお祈りいたします。



合掌